ライフストーリーの図式化の試み（2）

——信仰の継続と離脱の過程——

龍谷大学 猪瀬優理

1 目的

本発表では、主にライフストーリーの持つ物語の構造を UML を用いて図式化することによって、その物語の持つ意味をより明確に捉えることを可能にする可能性について検討する。

2 方法

ライフストーリー法は、近年の社会調査で最もよく使われる方法の一つだが、現在の方法論では複数の事例を統一的に記述し、比較検討して普遍的なモデルを作ることを目的とする研究には適していない。本発表では、物語論の観点を参照してライフストーリーに構造を仮定し、ライフストーリーはいくつかの過程から構成されるものと考え、その構造にしたがってインタビュー結果を図示したものを比較検討する。

3 結果

本発表では、従来あまり着目されてこなかった二世信者の信仰の継続と離脱の過程について着目する。入信・脱会の過程は「自己と意味体系の根本的変容」と捉えられ、「個人の意味体系は、初期の社会化と人生全体を通じての他の信者との相互交流を通して、社会的に獲得され支持される。個人が意味体系を変えるとすれば、それは社会的相互交流を通じてである。そして、意味体系とそれを支える集団へのコミットメントを促す過程は、根本的には社会的な過程」である(マクガイア 2008:153)。二世信者の場合は「初期の社会化」の時点で信仰を持つ家族を含めた教団との交流が前提となっているが、二世信者はある程度共通した「初期の社会化」のもとでそれぞれの人生における信仰の物語を形成していくにもかかわらず、全員が親世代からの信仰を受け継ぐとは限らない。このとき、個人のライフサイクルにおける重要な社会的諸要因（進学や就職、結婚や転居など）を検討することは重要である。入信・脱会に関する諸理論を参考にし、これまでの二世信者への聞き取り調査のでえられた複数の事例から、二世信者の信仰継承のパターンを離脱・維持・強化の三つのパターンとして図示した。

4 結論

離脱・維持・教化のそれぞれの状態遷移図の比較から信仰継承の成否を分ける要点が明らかになる。現状では特に脱会者に対する聞き取り調査は十分ではないが、本研究をもとに入信・脱会過程における重要な要素を抑えることで、入信・脱会調査のための半構造化インタビューのためのインタビューガイドをより洗練させることができるだろう。また、ライフストーリー法には、大きく分けてリアリズム・アプローチ（解釈的客観主義アプローチ）とナラティブ・アプローチ（対話的構築主義アプローチ）という二つのアプローチがあるとされる（桜井・小林編 2005:29-30）。本発表では、基本的には前者のアプローチによって議論を行うが、物語の構造化とその図式化という手法については、後者のアプローチにも適応できるものであることも示唆する。

【参考文献】

桜井厚・小林多寿子編, 2005, 『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房
マクガイア, B.メレディス, 2008, 山中弘・伊藤雅之・岡本亮輔訳, 『宗教社会学—宗教と社会のダイナミクス』, 明石書店(Maguire, Meredith B. 2002. Religion: The Social Context. 5thed. Wadsworth)